

ソレイユのサプライズライブは、出会いの曲ということで、花音からのリクエストでオリジナルスター☆多となった。しかしそれは、ソレイユの3人にとってもサプライズとなった。

相当な時を経て、ステージのアイカツシステムが起動している。それどころか、フィッティングルームを経ていないのに、衣装がハイパレードに。今の感覚だと少し見劣りする映像だが、観客の多くがこの場所にアイカツシステムがあるのを知らず、ステージはおおいに盛り上がった。

「そういえば間近でアイカツシステムが動いてるの見るの初めてだよ、やっぱり凄いね！」

ライブを終えた花音が興奮気味に。星宮いちごも若干興奮気味だ。

「私たちも知らなかったんですよ！ステージが始まる20秒ほど前にメッセージが映って」

「花音さんが仰る『凄い』は、今日はあたしたちの先輩で先生の仕業です」

「ほんと、穏やかじゃないわね、召苗先輩」

「でも『いつもより50センチステージ前端が短いよ』って凄い無茶振りだったね！」

言葉のわりにははしゃぎ気味の星宮。その笑顔に花音もつられる。

「信頼されてるんだね、みんな」

花音の言葉に目を細める霧矢。

「そうだと嬉しいです。結構な数、私たち3人を含めて、あの人のおかげでもっと『星として輝けて』いると思っていますから…」

皆の視線が下のフロアに。その表情は優しい。

アンジェリカが驚き顔で吾華音に言う。

「吾華音、ちゃんと食べてたよね？いつ作業してたの」

残りの料理をつまみながらアリーシャも続けた。

「学園長、じゃないかー。途中から寝てたもんねー。カノンさんの歌優しいから、めっちゃいい感じで寝ちゃってるよ」

「…すみません、ライブで寝るとか論外だろ姉貴…」

すっかり呆れ顔の涼川弟、だが。

「あはは…涼川先生、あまり呆れないであげて下さい。9割方、ティアラ代表の仕事ですから。さっき貰ったあれこれに、今のデータをこのシステムにダウンコンバートするプログラムが入ってて。私はデータ通して、少しだけオペしただけ。ほんと凄い…」

吾華音が目を細める。一方で、現役アイドルであるところの新は目を丸くしている。

「お姉ちゃんのスマホってアイカツシステム動いちゃうんだ…なんか湯気出てる気がするけど」

「途中からコネクタ以外氷水に浸けてたからね。手持ちの予備電源全部使い切ってあの数分のステージだよ。この端末の仕様決めたのもティアラ代表…涼川先生、お姉さんは凄い人です」

それだけの放熱をしても熱暴走だけはしない。現場のノウハウ、実践の積み重ねが生んだ機材の数々が、最新のアイカツを支えている。

「まあ、わかってはいるんだけどな。めっちゃめっちゃ凄くても妙なことし

でかして点下げる人っているだろ、ジョニー先生とか。まああれは照れ隠しか…ちょっと真似できない」

涼川が微笑んで言った。

「お姉さんもきっとそうです。私もたまに、しちゃいますから、そういうの」

眉をひそめつつ笑顔で言う吾華音。すかさずアリーシャが新に耳打ちする。

(そうなの？アラタ)

(だいぶ…あはは)

(新ちゃんには甘えるのね、私も長いけどそういうの無いな…)

(そうなんですか？)

「あーらーたー、機密漏洩は高くつくよー？」

「秘密の話だって知らなかったよ！」

「はあ、優秀な変わり者が多いな、この界限は」

涼川の言葉に吾華音が、少しだけ意地悪な顔で言う。

「先生がそれを言いますか？そういえばこないだ久しぶりにシュラトさんと…」

慌てて涼川が言葉を遮った。

「あいつつめ…！すまん召苗、俺も大概だ…」

「自覚あるなら結構ですけど？」

周囲が不思議そうな顔をする中、したり顔の吾華音。やれやれという表情の後、涼川はほっとした顔。

「…いつも通りだな、少し安心した」

「そんな簡単に変わりはありませんよ、『涼川さん』」

「…悪い。姉貴の事、よろしくな」

互いに小さく眉をひそめた様子を見て、寝たふりをしていたティアラだけが微笑んだ。

アンコール曲も終わり、打ち上げに行く前の花音への挨拶を済ませた一行。翌日車を交換することを口実に、アリーシャは新たちと一緒に学園の寮へ。アンジェリカは「折角出てきたし、知ってるお店でもうちょっと飲んで帰るよ」と近くの駅へ歩いて行った。(その夜、横須賀のとあるジャズバーが、噂を聞きつけた各方面で朝まで大いに賑わった。それはまた別な話)

TKYテレビ近辺からティアラ学園長の自宅までは大した距離ではなかったが、酔い覚ましにドライブして、とETCカードを渡された吾華音は、首都高から海側へと車を走らせた。

目立つ車と時間帯だけに若干煽られつつも、全く危なげなくいなして進んでいく車。パトカーの接近があってもナンバーを見るや離れるのを目の当たりにし「アーヤめ…普段相当やらかしてるな」とぼやく吾華音。

何故かドリアカの生徒である冴草きいの声で喋るナビをティアラが操作している。「海ほたる行こう、吾華音」

時計に目をやると、まだ日が変わるには時間がだいぶある。

吾華音は「お望みのままに」と静かに呟いた。

やがて海ほたるへ。駐車場に車を置き、展望デッキへ。先に行ってて、と告げたティアラがファミマの袋から緑茶のペットボトルを取り出し

た。

「これだったよね？」

「あれっ、ティアラ代表ご存知でしたっけ」

「エンジニアでコーヒーも紅茶も飲まないなんて珍しいよ、おじさん達から何度か愚痴を聞いたわ」

楽しげに言うティアラ。いろはすのボトルキャップを捻り、何口かあおる。ややあって、

「ねえ、吾華音…ナオ君の事、今でも好き？」

口に含んだ綾鷹を盛大に噴き出した後、真っ赤になる吾華音。

「いっ、いえ！あれはほんと！世間知らずな子供の時の！それに花音さん差し置いてとかそんな…」

「えっ？あの子はただの友達って聞いているけどなあ…なーんて。冗談。…吾華音、結構昔のことを気にしているよね」

微笑んだままのティアラだが、眼が真剣だ。戸惑いとともに吾華音が口を開く。

「そう…でしょうか。何か自分を縛っているつもりは、全然ないですよ？我儘を聞いてくれる皆に申し訳なく思う程度には…見えませんかね、あはは」

照れ隠しに頭を掻く。少しだけ眉を顰めたティアラがすかさず。

「今日から貴女は、今の業務にあって頂点の位置についた。これを始まりとするか一定の終わりとするかは貴女の自由」

「まだ、始まってもいけない気がします。実感が出てくるの、もうちょっと先かも」

「じゃあ、いいタイミングじゃない。始める時じゃないの？ずっとバツ

クステージを支えてきた貴女の、今度は自分の、ステージの上のアイカツ」

「えっ…」

思ってもみなかった問いかけに、吾華音は黙り込んでしまった。ティアラは続ける。

「待っている子もいるの、わかっているんでしょう？」

「…愚痴られましたか？美月に」

冷たい海風が吹き抜ける。陸側の空にまで反射する、眩しい街灯を背にティアラが続けた。

「お察しなら話は早いわ。いちごちゃんが前に出て、あれこれあって引退を撤回した美月だけど、伸び悩んでる感覚がある。聞いたことがあるの。そこまでやって後悔があるの？って」

「意外と引きずるなあ…私との事なんて、美月もいちごちゃんも居ない間のスタライの顛末に比べたら、全然小さな事なのに」

空白の1年。折しも目の前にいるティアラ学園長の躍進の年でもあった。皆が存在するはずの2つの軸を失くし、それぞれを思いつつも当時の最適解を見い出せずにいた。その年、珍しく吾華音は多くの生徒の前に現れ、話を聞き、やんわりとそれぞれの間を繋いだ。アイドルは実力でなく求心力だと思い知らされた、成長の時だった。

しかし、当事者が目を向けない自由もまた存在する。

「若い頃の嫉妬ってそういうものよ。自分が師と仰いだ人が、対等の立場と断言した子が、先輩とはいえ学内にいる。そして、その先輩は裏方である事を理由に一切の勝負に応じなかった。一点の曇りもない筈の空が、何故だかどうしてもぽつんと雲が浮かぶ空に見える」

その「対等の立場」が自身ぴんとこない。そもそも本人がそれを口にした事はないのだ。吾華音にとってもジョニー先生は師に他ならず、比肩する立場などではない。メビウスの輪の上を走り続けるかのようなもどかしさを覚える。

「大袈裟だなあ。とっくに美月とみくるちゃんのが上ですよ」

「オーディションに出なかった貴女の中ではそうかもしれない。でもね。ステージに立つ子たちは、オーディションを経て自分の位置を確認している。もどかしいんじゃないかしら…」

偶然にも、今の自分が抱く思いと生徒たちの思いを重ねられる。『こういう感覚』だというのなら、同情の念も当然ある。しかし。

「美月ひとりの成長のために表舞台には立てません、それは、私が手掛けたステージを身に通したアイドルみんなへの…うまく言えませんが…不義、みたいなもので」

「そうかしら…。むしろ逆だと思うけれど。それに、待たせている人を私はあと2人…私を入れると3人ね、知っているわよ？」

「新は納得してくれている筈です。でも、もうひとり？」

「そろそろヒメさんを、誇らしさと背反する罪悪感から解放してあげて？」

「えっ…」

思ってもみなかった名前がティアラの口から出た。学園長の思いは、ずっと自分と共にあったはず。何もかも打ち明けてくれていたはず。違うのだろうか。

ティアラに背を向け、外海に目をやる吾華音。暗い海のあちこちに、微かな船の灯。陸とのコントラストは、まるでステージとバックステージのそれ。胸いっぱい吸い込んだ、微かにディーゼル排気臭の混ざる潮の香りの空気を、どっとはき出す。肩が落ちる。

微かに波音。悩む気持ちが背中に滲む。その背中に向かってティアラはさらに続けた。

「予定していた来月のステージだけど、貴女が好きに使って構わないわ。1人が嫌なら誰かと一緒でもいい、オープンなライブが嫌ならシークレットでもいい。でも、貴女が誰かの前に立って、1曲でも歌って。これはASDC主宰からのオファーと受け止めて」

吾華音が振り向く。少し視線を落とした後、ティアラの目を見て一言。

「断ると？」

わずかに口角を上げてティアラが言った。

「折角のアンリミテッドオペレーター権限が…」

聞くや、吾華音は少し笑いを堪える仕草の後、我慢できず笑いながら応えた。

「ひどい上司もいたものです！」

この人は少し自分に似ているかもしれない。いつだって直球勝負なところが。でも、おかげでしっくりきた…吾華音の中に「全てを解く鍵」が降りる感覚が。希望が表情に。その顔を見たティアラが微笑んで言った。

「なんだか部下は嬉しそうだわ？」

当惑から一転、決意を滲ませる表情で吾華音が告げる。

「ええ、何だか突然、繋がった感じがして。ステージやります、いえ、やらせて下さい。ただし…」



思いつきながら既に具体的な案を提示する。聞いているティアラの顔にプロデューサーとしての『企みの笑み』が少しずつ浮かんだ。

「…面白いわね。予算は私が個人で持つから、領収書いくらでも持ってきていいわよ！なんならこのカード持って行きなさい！あと、流石にフェアじゃないから、ヒメさんには明日私から伝えておくわ」

「うわぁチタンカードだ…いいんですか？私はともかくゲストのうち2人は結構なセレブで金銭感覚おかしいですよ？」

「実業家を甘く見てもらっちゃ困るなぁ吾華音、お金はあるところに集まるのよ♪」

「言いますね。では、その資本に負けないステージアクトで対抗します」

「楽しみにしてるわ、本当に」

ふと、ティアラの右手が差し出される。その手を握る吾華音、ビジネスの握手。しっかりと。さらにティアラの左手が吾華音の右手を包む。信頼の握手。吾華音も同様に。

「さて。私は明日オフだから、夜景が綺麗なところで外泊しちゃおうと思うけど、吾華音も来る？勿論奢り。幻のオリジナルレシピのコンソメスープどう？」

「横浜グランドですか！うう…魅かれますが…居候の身でして…」

「じゃあまたそのうちね。悪いけど運転、お願いできるかしら」

「それは勿論。弟さんにしっかり頼まれましたし」

「ナオくんと一緒によかった？」

「そのネタはもう許して下さい…」

アリーシャのNSXのオーディオにも、行き先近辺ゆかりの花音のアルバムはインストールされていた。それをBGMに山下公園前まで。ホテルに車を入れると早速迎えが。挨拶もそこそこに車を出す。信号待ちで止まると、コスモクロックが立方体を回すアニメーションを描いていた。ふ

と、アイデアを書き出したい衝動にかられる。

「…ちょっとだけ1人作戦会議、いいよね」

日本大通り駐車場に車を置くと、iPadを片手にビジネスホテル街の並びのとある中華のお店へ。杏仁豆腐とジャスミンティーを愉しみつつペンを走らせる。大まかに書き出したところで。

「この時間にラーメンかあ…ええい、頭使ったしいいや！」

夜ラーメンの誘惑に負ける吾華音であった。